

(公社)日本鍼灸師会 全国大会 in 愛知大会レポート

公開講座:「多職種で人を診る『統合ヘルスケア』

講師:伊藤京子先生(名古屋大学大学院 客員研究者)

報告者:西村理恵(研修委員会)

概して、鍼灸師以外の一般市民も対象となっている講座であるため、例が多用されわかりやすい講座であった。

自己紹介を兼ねられ、総合診療医とはどのような医師か、ご自身の診療経験を通じてのご紹介があった。医師というと、特殊な職種であり、近寄りがたい存在という印象を持たれやすいようであるが、伊藤先生ご自身のそのように思われることの歯がゆさ、一人の人間として統合医療に向き合う様子などが語られ、医師の存在が身近に感じられる導入であった。

統合医療についての説明があり、医療として、医師だけが対応するものではなく、多様なアプローチの方法があることが示された。具体的な例として、不眠に対してどのようなアプローチが考えられるか、網羅的なご紹介があり、その中の一つとして鍼灸について言及された。それぞれ、根拠の説明もあり、説得力があると同時に、患者としても自身で根拠について考える必要性も示唆されていたように思われる。鍼灸をはじめとして、様々な療法のエビデンスの探し方、適切な治療者の選び方など、患者自身によるアプローチの方法、重要性が示された。

また、特定の病態(患者)に対して、一人の医療者が対応するのではなく、同時に行われ得る多面的なアプローチとして、多職種連携についてのお話があった。多職種連携とは何か、具体例とその意義、また、あらためて認識された医師の役割について語られた。その中で、医療のゴールは、患者のウェルビーイングであるという Cassell(2012)の引用がなされ、医療者だけでなく、一般市民も医療の目的を再認識すべきであると感じさせられた。

全体を通じて、患者も自身の健康の意味や心身の状態について、その時にはじめて医療者に頼る、頼り切るのではなく、普段から自身でその意味を考えることの重要性を訓えられたように思う。